

唐門

黒と金の唐門は、1628年に江戸の増上寺に建てられたものです。仏殿と同様、唐門は1647年の建長寺大改築の際に建長寺に寄進されたものです。

増上寺は強力な徳川幕府と密接な関係にあり、唐門は元々、二代将軍徳川秀忠（1579年～1632年）の妻の霊廟の入り口であったと言われています。壮大なスケールの門は黒漆と精巧な金箔の豪華な組み合わせを誇り、徳川家の建築物の特徴となっています。

起伏のある屋根は、中央部が高く、両端が湾曲しているのが特徴で、唐破風と呼ばれる様式です。これは屋根の最も正式な様式で、日本の寺社や城などの重要な門によく使われています。唐門には4本の柱があり、扉の片側に2本、もう片側に2本あります。

建長寺では唐門は、伝統的に住職の住居であった方丈への正門として機能しています。この門を使うのは、天皇と勅使に厳密に限定されています。僧侶自身を含め、他のすべての訪問者は、方丈への横の入り口を使います。

この門は重要文化財に指定されており、2011年に修復されました。